

修士 (2017 年度)

今日における森の新しい生業創出活動の意義 ——「NPO 法人秩父百年の森」と大滝村住民が取り組む樹液事業を事例として——

落合 志保

本論文の目的は、埼玉県秩父市の森林ボランティアと山主の協働によって創出された森の新しい生業はどのような意義を持つのかを明らかにすることである。今日の日本では森林資源が多くあるにもかかわらず十分に利用されておらず、山の放置が増加している。森林の問題を解決しようと政府や企業が取り組んでいても解決できない問題を市民は様々なアクターとの連携と自主的な取り組みによって解決するため、本論文では市民に着目する。

まず、先行研究で明らかになったことを述べる。森と人の関係を見るために、森を含む自然とのかかわりを検討した。自然と人のかかわりは、かかわりの程度によって、田んぼのような「近い自然」と原生林のような「遠い自然」などカテゴリーに分けられる（鳥越 2001）。また、人が自然とのかかわる方法として生業、マイナー・サブシステム、遊びなど、自然とのかかわり方は多様である。近年、森と人とのかかわりが変化していることにに関して、鬼頭（1996）は「切り身」「生身」という概念を使って説明した。つまり、人が森と密接にかかわって暮らしていた時代では、木は「生身」であったが、森とかわらなくなったため、人は森とのかかわり方を文化や社会と切り離し、経済的価値を見出す「切り身」として扱うようになった。

森林ボランティアの意義は安価な労働力ではなく、参加する市民が農山村の問題を自らの問題都市その解決方法について取り組むことであるという（山本 2003）。松村正治は、里山ボランティアの参加動機について明らかにし、新関係志向型、市民運動型、健康志向型、環境学習型に分類した（松村 2009）。しかし、この動機は奥山の森林ボランティアにも当てはまるのか疑問が残る。また、森林ボランティアが山村の人の考えを理解し、生業と市民性が合うことで、森林を山村と都市の新しいコモンズととらえられる（北尾 2009）。では、どのように市民は山村の人びとと生業を創出し、森林をコモンズととらえるのか、これを明らかにすることによって、生業の創出における重要な視点も明らかになる。本研究では環境社会学の経験論を重視する立場をとる。なぜならば、人は経験したことから各人にとっての生活世界をつくりだし、行動に移すことができているからである（鳥越 1997）。つまり、その人の経験を見ることで、なにゆえその人がある行為をとったのかわかるのがこの方法論の特徴である。

以上、先行研究で欠如している視点を踏まえ、本論文では、鳥越の経験論を重視する立場を取り、①どのように森林ボランティアは山村の人びとと生業を創出し、森林をコモンズととらえるのか、②生業を創出する重要な視点、③生業の創出を支える人びとの動機の3つの視点から、埼玉県秩父市で活動をおこなっている「NPO 法人秩父の森（以下、秩父の森）」と大滝の山主の協働によって取り組まれているカエデの樹液事業を事例としてそれを明らかにする。

「秩父の森」を設立したのは、秩父市街地に生まれ育った S さん（60 代男性・自営業）である。そして、S さんが考えた森の新しい生業を受け入れたのは、秩父市大滝に生まれ

育った山主 Y さん（60 代男性）である。S さんは秩父の自然と深くかかわる中で、秩父で起こっている自然破壊から保全意識をもち、「保全」と「事業」の両方を重視した「かかわり続けられる森林のモデル」の構築を追求した。Y さんは林業だけでは生計を立てていけなかった経験から新しい山の暮らしのモデルを考え続けていた。双方の考えが交差することで、生業が創出することにつながった。また、「生業性と市民性」が出会い樹液事業が創出されたが、S さんは山を持っていないため、棲み分けをおこなっていた。つまり、市民である森林ボランティアと山主は協働に成功したとしても森林を広い範囲の「コモンズ」ととらえることはできないことがわかった。また、この生業において重要な視点は、森にあるものを「経験」を通して「資源」ととらえなおすこと、山主の積極的な仕組みづくり、第三にその地域と時代にあった森の「在り方」を考え、かかわり続けることである。

また、内山は森林ボランティア活動をする人びとの根底には「荒廃から森林を救いたい」（内山 2001: 14）という使命感をもっていると指摘していたが、「秩父の森」では保全への思いというより、自然とかかわることから各々が参加し続ける意義を見出していた。「秩父の森」の活動は、秩父の豊かな自然の中でおこなう農作業を通して自然とかかわる実践である。「秩父の森」の活動は「伝承的生業」ではないものの、自分の家の近くでは体験できない一種の『自然』と遊ぶための仕掛け」（菅 1998: 246）であると考えられる。最後に、森の新しい生業である樹液事業の意義を導き出した。樹液事業は非効率ではあるものの、「保全」を念頭に置いた労働から樹液の「使用価値」（内山 1989）を生み出している。そして、エコツアーや「秩父の森」の活動などを通して、その事業の目的や意義を知った消費者によって樹液の「使用価値」はさらに見出される。つまり、樹液事業は広範囲における森と人の「かかわりの全体性」を取り戻すことを可能にする意義があった。今日の森と人のかかわりの在り方は、樹液事業のように地域の自然と深くかかわった人の経験から森の新しい資源を見出し、「保全」を念頭におきながら、それを活用する生業を、山主が積極的に取り組み、そしてそれを森林ボランティアがサポートするような在り方である。

今後の課題として、本論では大滝の樹液事業に参加しない山主の考え、樹液組合の家族が樹液事業をどのように理解しているのかを聞くことが不十分となっている。これらを視点と問題意識を本論で扱いきれなかった課題とする。

参考文献

- 北尾邦伸, 2009, 『森林社会デザイン学序説 第3版』日本林業調査会。
鬼頭秀一, 1996, 『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』筑摩書房。
松村正治, 2009, 「里山ボランティアにおける自由の条件—人間—植物関係の批判社会学詩論」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告：園芸文化』（6）：48-68。
菅豊, 1998, 「深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論」篠原徹編『現代民俗学の視点 第1巻 民俗の技術』朝倉書店, 217-46。
鳥越皓之, 1997, 『環境社会学の理論と実践』有斐閣。
———, 2001, 「人間にとっての自然—自然保護論の再検討」鳥越皓之編『講座環境社会学第3巻』有斐閣, 1-23。
内山節, 1989, 『自然・労働・協同の理論—新しい関係論をめざして—』農山漁村文化協会。
———, 2001, 『森の列島に暮らす—森林ボランティアからの政策提言—』コモンズ。
山本信次, 2003, 「森林ボランティアとは何か どこから来て、どこへ行くのか」山本信次編『森林ボランティア論』日本林業調査会: 15-28。